

【103】

氏名	姜 錫 麟 かん そく りん
学位の種類	医学博士
学位記番号	論医博第48号
学位授与の日付	昭昭37年6月19日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	Contrast Radiography of the Multifidus Muscle (多裂筋の造影X線診断法)
論文調査委員	(主査) 教授 福田 正 教授 近藤 鋭矢 教授 荒木 千里

論文内容の要旨

筋肉のX線造影診断法は、いまだ先人の試みていないものであり、まったく著者の独想にかかる診断法である。腰痛を訴える133例の患者について、多裂筋の造影X線撮影を行ない、筋変化を明らかにした。第4、第5腰椎の高さにて、局所麻酔のもとに45% Hypaque 3cc. を両側多裂筋内に注射したのち、両側単純撮影を行なう。

まず、対照検査として、腰痛を訴えない7名の成人につき多裂筋の正常角度、長さ、幅を測定し、造影剤の正常吸収時間を測った。この場合、局所麻酔、全身麻酔ともに使用した。下部腰椎結核患者30例では、一般に多裂筋不整、収縮、浮腫あり、炎症によるものと思われる。

椎間板ヘルニア患者で、筋造影を行なったもの43例中37例は、多裂筋造影所見は異常を示した。またそのうち31例では腰痛を訴える側の多裂筋が収縮していた。残余の6例は、両側の多裂筋に異常所見があり、すなわち正中線において第4腰椎間板の前方脱位を示した。本群の9例ではまた造影剤の吸収時間の遅延がみられた。

正常椎管造影像を示した14例中10例に多裂筋の異常造影像がみとめられ、このうち数例は筋肉変化の症状を有していた。椎管造影検査未施行の42例患者中32例に多裂筋造影の異常像があらわれ、またこのうち17例では造影剤吸収時間が遅延していた。Bechterew病3例と家族性筋萎縮症2例では多裂筋は正規かつ対称的であったが、著明な収縮をしめした。

本診断法は、独想的であり、多裂筋造影によって腰痛患者の原因を明確に診断する目的に使用して、臨床X線診断学上きわめて意義が大きいことを知った。

論文審査の結果の要旨

従来、筋肉のX線診断は、わずかに軟部組織の単純撮影によって行なわれ、不完全不確実なものであった。そこで著者は、いまだ先人の企図しなかった筋肉の造影によるX線診断法を創案した。

本論文は、多裂筋の造影撮影法の紹介、健常多裂筋の長さ、幅、左右筋肉角の測定と腰痛を訴える患者

における本法を応用した結果について詳述している。

すなわち、下部腰椎結核症にては、多裂筋の不整、収縮、浮腫をみとめ、椎間板ヘルニアでは、多裂筋に収縮、造影剤の吸収時間の遅延のほか、多裂筋の変化により腰椎間板前方脱位がみとめられた。Bechterew 病と家族性筋萎縮症では、多裂筋が正規かつ対照的であったが、著明な収縮をしめした。そのほか、多裂筋の異常造影像と椎間造影検査像との関係についての検討を行なっている。

この筋肉の造影 X 線診断法は、まったく著者の独創にかかるものであり、これを多裂筋造影に應用して腰痛患者の原因を明確に診断することが可能であることを証明したものであって、臨床エックス線診断学上寄与することきわめて大きいものと信じる。よって、添付せられた参考論文 3 編とともに、本論文が医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。